

学生取材レポート

第20回京都教育懇話会

日本の未来と人づくり―「理系?」「文系?」企業が求める人材とは―

3月21日(水)、立命館朱雀キャンパスにて、第20回京都教育懇話会を開催した。科学技術力の停滞が懸念され、子供たちの「理科離れ」も叫ばれている今日、いかに科学技術への関心を高め、次世代の教育に取り組みば良いか。そもそも「理系」「文系」の枠組みは必要か、高校、大学が目指す教育と企業が求める人材とに乖離があるのか。高校、大学、企業それぞれの立場から日本の人材育成の在り方を議論する場となった。

第一部前半では、タカラバイオ株式会社 代表取締役社長の仲尾功一氏が基調講演を行った。「理系文系に関して、分けることはなく、両方の知識が必要だ」と述べた。また、「魅力的な人材とは、広い視野で物事を考えられるトレーニングを積んだプロフェッショナル、また理系文系を超えた領空侵犯する勇気を持った積極的な人である」と提言した。そして、自らの様々な分野の仕事経験を踏まえ、「若者に幅広い選択肢を持てるチャンスを与えてほしい」と述べた。仲尾氏の他分野へはみ出してやっていくという積極的な仕事スタイルが如実に現れる講演だった。

第一部後半では、京都市立堀川高等学校 校長の荒瀬克己氏が基調講演を行った。「基礎の重要性を述べ、基礎があって、活用する能力、思考判断する能力が身につけられる。そこから学習意欲を引き出せるのではないか。理系だけ文系だけではいけないと実感させることができるのではないか。また、わかりやすいもの(安全、安心、簡単、手軽なもの)しか提供できない教育現場から、理系文系という概念が生まれるのではないか。用意しすぎ、先回りしすぎの商品化した現教育を反省し、子供たちにふさわしい環境を」と述べた。「未来からの要請にこたえる」のが学校の役目と荒瀬氏。子供たちへの愛情が伝わる講演だった。

第二部では、立命館大学産業社会学部子ども社会専攻・教授の山下芳樹氏をコーディネーターに迎え対談を行った。理系文系を分けることは良いことなのか、理系文系を分ける時期が問題なのか、理科離れはしているのか等、会場の意見を聞きながら対談をすすめた。

理系文系という狭い視野でものごとをみるのではなく、常に好奇心を持って広い視野で物事をみることができ、アクションを起こせる人にならなくてはと思った。また、理系を理解できる文系、文系を理解できる理系といったものの見方ができるような人になれば、理系だから、文系だからと区別せずに互いに助け合えるのではないかと思った。

【取材】追手門学院大学1年生 古賀野 莉子